

## 国府台学会経済研究会（第121回）

### マックス・ヴェーバーにおける生活態度論

#### —『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と『儒教と道教』—

荒川敏彦

研究会開催日：平成24年6月11日

（報告要旨）

(1) 従来、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（以下『倫理』と略記）や『儒教と道教』は、「近代化」の問題として取り上げられることが多かった。その視点から、たとえば前者は「いかにすれば近代化が達成されるのか」という関心で、後者は「中国が近代化に遅れた理由は何だったのか」といった関心で読まれてきた。しかし、そのような直線的な発展段階への関心は、ヴェーバーの合理化／合理主義の見方の多元性とは相容れないものである。

では「近代化」の視点から離れてみたとき、『倫理』や『儒教と道教』はいかなるテキストとして解釈されうるだろうか。本報告では、宗教倫理による生き方—生活態度 *Lebensführung* 形成という視点から、両テキストを関連づけてみたい。

(2) はじめに『倫理』についてであるが、この著作のいたるところで生活態度の語が用いられているにもかかわらず、近代資本主義の成立という社会科学上の大問題への関心や、宗教と資本主義との密接な関係というパラドキシカルな議論への関心によって、このキーワードは後景に追いやられてしまいがちである。

『倫理』の冒頭を見てみよう。ヴェーバーは次のように書き始めている。「ドイツ・カトリック派会議の席上や同派の新聞、文献の中でたびたび論議されていることだが、近代的企業における資本所有や企業家についてみても、あるいはまた上層の熟練労働者、とくに技術的あるいは商人的訓練のもとに教育された従業者についてみても、彼らはいちじるしくプロテスタント的色彩を帯びている」（RSI, S17-18= 大塚訳 16頁：強調点は原著者。下線は引用者。以下同じ）。つまり、プロテスタントと資本主義との間に密接な関連があるというのはすでによく知られた事柄だ、この確認から『倫理』は始まるのである。

しかもプロテスタントを生み出した宗教改革の性格について、「宗教改革が人間生活に対する教会の支配を排除したのではなくて、むしろ従来のは別の形態による支配にかえただけ」であり、それによって「家庭生活と公的生活のあらゆる領域において、考えうる限りもっとも広い範囲にわたって徹底的で、限りなく煩わしくかつ真剣な、生活態度 *Lebensführung* 全体の規律」が求められるようになったと述べる（RSI, S.20= 大塚訳18頁）。その煩わしい規律を、「当時、経済的に興隆しつつあった市民的中産階級」は自ら進んで受け入れた。この一連の事柄への疑問が提起されることから『倫理』は始められている。

このように冒頭的一段落を読み返すだけでも、『倫理』における生活態度の規律化という問題の重要性が見えてくる。生活態度の規律化は、信仰日記による記帳 *Buchführung* という「事業経営」的な自己管理法などの発展と相俟って進展していくが（RSI, S.123-4= 大塚訳213-4頁）、『倫理』末尾では次のように結論が述べられる。「近代資本主義の精神の、

いやそれのみでなく、近代文化の本質的構成要素の一つというべき、職業理念を土台とした合理的な生活態度 *Lebensführung* は——この論稿はこのことを証明しようとしてきたのだが——キリスト教的禁欲の精神から生まれ出たのだった」(RSI, S.202= 大塚訳363-4頁)。結論を示す一文の主語が生活態度であることを確認しておきたい。

(3) 次に、『儒教と道教』に目を移そう。このテキストは、従来もっぱら中国「停滞論」および「西洋と異なり中国には〇〇がない」式の「欠如論」が注目され、それら「停滞」や「欠如」を家産官僚制という社会構造によって説明したものと理解されてきた。だがそうした理解の仕方は、『儒教と道教』が「世界宗教の経済倫理」シリーズの一環をなす宗教社会学の著作であることへの配慮を欠いたものと言わざるを得ない。

しかし私見では、こうした理解の仕方が生じる背景に、『儒教と道教』のテキスト問題がある。『儒教と道教』はまず雑誌論文として発表され、その後『宗教社会学論集』に収録する際に大幅に加筆された著作なのである。加筆の際、当初「第1章 社会学的基礎」とされていた箇所は「第1章～第4章 社会学的基礎A～D」へと、章立てで言えば4倍に膨れあがった。この「社会学的基礎」は、家産官僚制や氏族(=宗族)など、宗教社会学に向かう前提の議論である。家産官僚制などの社会構造論に引きつけすぎた『儒教と道教』理解は、この膨れあがった前半を過大評価した結果であると考えられる。

ところが「第1章 社会学的基礎」(改訂版では「第4章 社会学的基礎D」)の末尾では、次のように述べられている。合理的な経営資本主義は、中国では「ある種の心情的基礎の欠如によっても妨げられた。とりわけ、中国の『エートス』のなかにその場所が見出され、また官吏層や官職補任期待者層によって担われた態度によって妨げられたのであった。そのことを述べるのがわれわれの本来の主題であって、この主題にわれわれはいまやと到達するわけである」(RSI, S.395= 木全訳178頁)。

膨大な加筆のために、翻訳で178頁を費やした後に「やっと」語られることとなった主題。『儒教と道教』の本論はここから始まるのである。ただしこの一節を「欠如」に注目して読んでしまっただけでは、元の木阿弥である。むしろ、儒教的知識を蓄えた「読書人」によって担われた「態度形成」が問われていると見るべきだろう。そうすることで、伝統中国に固有の生活態度が宗教倫理との関連でいかに形成され、いかに作用したかという宗教社会学的な問題設定が見えてくるのである。

(4) 今回の報告では、ヴェーバーの『倫理』と『儒教と道教』に通底する各文化に特有な生活態度形成の問題に焦点を当て、両者の主題を明らかにした。とくに『儒教と道教』における生活態度論に言及する機会を得たことで、今後の研究にとって重要なステップを踏むことができた。また、ヴェーバーにおける朱子学・陽明学の問題、停滞論の問題、ヴェーバーの議論と現状との関連、かつて活況を呈した儒教資本主義論の問題など、重要なご指摘・ご質問も数多くいただいた。貴重な報告の機会を与えて下さった国府台学会経済研究所、当日参加して下さい下さった先生方にあらためて感謝申し上げたい。

## 文献

- RSI=Weber, Max, 1920, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, J. C. B. Mohr.  
大塚訳=1989, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店。  
木全訳=1971, 木全徳雄訳『儒教と道教』創文社。